



Title	モヨロ貝塚から出土したイヌ科動物の線刻入り上腕骨について
Author(s)	内山, 幸子
Citation	北海道大学考古学研究室研究紀要, 5, 102-113
Issue Date	2026-01-08
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98750
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98750
Type	departmental bulletin paper
File Information	10 WS Uchiyama.pdf



モヨロ貝塚から出土したイヌ科動物の線刻入り上腕骨について

内山幸子^a

^a 東海大学国際文化学部 usatiko@tokai.ac.jp

要旨 北海道大学にはモヨロ貝塚から出土したイヌ科動物の線刻入り上腕骨が所蔵されている。この上腕骨について検討した結果、素材とされた上腕骨がオホーツク文化期のイヌよりかなり大きいことが明らかであった。これにより、素材とされたのはイヌではなく、エゾオオカミもしくはエゾオオカミとイヌとの交雑個体であった可能性が高いことを指摘した。オホーツク文化やその周辺文化の類例は、これまでにイヌとオオカミで確認されており、当時、両種を一連の動物として捉える認識があった可能性がある。また、本資料やその類例が上腕骨の全形を変えずに用いられたことや、骨幹部に非実用的な線刻が刻まれたこと、イヌ飼育が盛んであった礼文島・利尻島や網走市、サハリンで確認されたことから、とくにこれらの地域では、イヌやイヌとの関係性が深いオオカミに対して、独自かつ高い精神的価値が認められていたことが示唆された。

キーワード : オホーツク文化、モヨロ貝塚、線刻入り上腕骨、エゾオオカミ、イヌ

はじめに

北海道大学が収蔵しているモヨロ貝塚出土資料の一つに、イヌ科動物の線刻入り上腕骨がある。これは戦中の調査で出土し、オホーツク文化期のものとみられている。また、この上腕骨は男女2体の人骨と同じ箱に保管されていたため、人骨に伴って出土した可能性もある資料である。

本資料については、これまで長らく詳しい検討が行われてこなかった。筆者はこの資料の存在を、坂本尚史氏（北海道埋蔵文化財センター）からご教示いただき、2020年に中沢祐一氏（当時、北海道大学医学研究院人類進化学教室、現在、北海道大学総合博物館）のご協力のもと、観察と計測を実施した。そこで得られた所見は、2025年3月22、23日に北海道大学で行われた「WORKSHOP モヨロ貝塚を考える ― 新視点からの展望 ―」（北海道大学大学院医学研究院人類進化学教室主催）で報告している。本稿は、そこでの報告内容をもとに、同文化期の類例やエゾオオカミの出土例も加えたうえで、素材とされた動物種やこの資料の持つ意味について検討を試みたものである。

なお、本資料は、『北海道大学所蔵モヨロ貝塚（網走市）収集考古資料』（中沢ほか編 2025）に、「資料ID:M1-99-1-038-193-1（旧所蔵No.58）」（122・235頁）として掲載されている。

1. 本資料の詳細

本資料は、イヌ科動物の左上腕骨を素材とし、近位部を少し欠く以外は欠損や加工もなく、元の形状がそのまま活かされている（写真1）。近位部の割れ口の一部は新しいが、接合できる破片は見つかっていない。また、保存状態の不良に起因した剥げが、表面のかなり広い範囲で見られる点も目に付く。



写真1 モヨロ貝塚出土のイヌ科動物の線刻入り上腕骨（縮尺40%）

遠位の骨端は癒合しているが、縫合線がわずかに観察できる部分もあるため、老成した個体とは思われない。なお、イヌ科動物のうち、*Canis* 属の上腕骨遠位骨端の癒合時期は生後6～8ヶ月ほどとされる(Elizabeth1972)。近位骨端の癒合状況については、欠損しているため不明である。

本資料の残存長は 183.33 mmと報告されており(中沢ほか編 2025)、推定全長は 190 mmほどとみられる。遠位幅は筆者による計測で、33.8 mmである。

全形の写真では分かりにくい、本資料では、骨幹部に細い線刻が数多く刻まれ、少なくともそのまともは5ヶ所で確認できる(写真2)。本稿では、これらをそれぞれ線刻a～eとした。線刻は明瞭なものから不明瞭なものまでであるが、後者については保存状態によるところが大きい。

もっとも目立つ線刻aとbは上腕骨の内側面に、上下にほぼ平行して前面に向かって右下がり刻まれている。線刻aは2～4 mmほどの上下幅のなかに6条刻まれ、その長さは、剥げのため正確には不明であるが、少なくとも16 mmほどある。線刻aの下に位置する線刻bは、3.5～4.5 mmほどの上下幅のなかに、線刻aよりも少し広い間隔で5条刻まれ、長いものは8 mmほどである。これも剥げにより両端が失われており、本来の線刻はより長かったようである。これら線刻aとbは、前面の左部でも確認できる。

線刻cは、外側面でもっともよく見える。短い線刻が3条あるが、左端が剥げにより失われているため、正確な長さは不明である。線刻cは前面の右部でもわずかに確認できる。

線刻dは、外側面から前面にかけて施され、剥げにより間が途切れて見えるものの、本来は長い2条の線刻が水平に刻まれていたようである。線刻aやbと同じく明瞭であるが、両脇は剥げにより失われている

ため、長さは不明である。

線刻eは、前面でとくに見やすい。剥げの影響から線刻はかなりあいまいで、3条の線刻がわずかに確認できる程度である。線刻eは外側面の左部でも見られる。

オホーツク文化期には、イヌの上腕骨で傷が確認されることが少なくないが、その位置は遠位の関節部に集中する傾向にあり(図1)、解体時や肉採り時、毛皮剥ぎ時についた傷であると推測される。本資料と同じく、骨幹部に傷が確認された例もあるが、本資料とは明らかに特徴が異なる。

また、本資料では、遠位部の滑車上孔がかなり大きい点も目を惹く。人為的に広げられた可能性もあるが、オオカミでは滑車上孔が大きいとされるため、加工の有無については今後の課題である。

2. 動物種の検討

本資料を‘イヌ科動物’とあいまいに表現しているのは、イヌ科動物のうちのいずれの種であるのか、特定されていないためである。前述したとおり、この資料は残存長が183.33 mmで、全長は190 mmほどと推測される。この大きさから、北海道やその周辺地域に生息するイヌ科動物のなかでキタキツネやエゾタヌキは候補から外れ、イヌもしくはエゾオオカミ(両種の交雑個体を含む)の可能性が考えられる。

種の検討には、形態分析やDNA分析が有効である。このうち後者については、本資料が、イヌやエゾオオカミ、もしくは両種の交雑個体という遺伝的にきわめて近い種が候補であるため、母系遺伝するミトコンドリアDNAの分析では不十分で、両親から受け継いだ核DNAの分析が必要となる。ただし、核DNAの分析は古代DNA解析では難しいことに加えて、線刻された本資料の破壊分析には慎重さが求められるこ

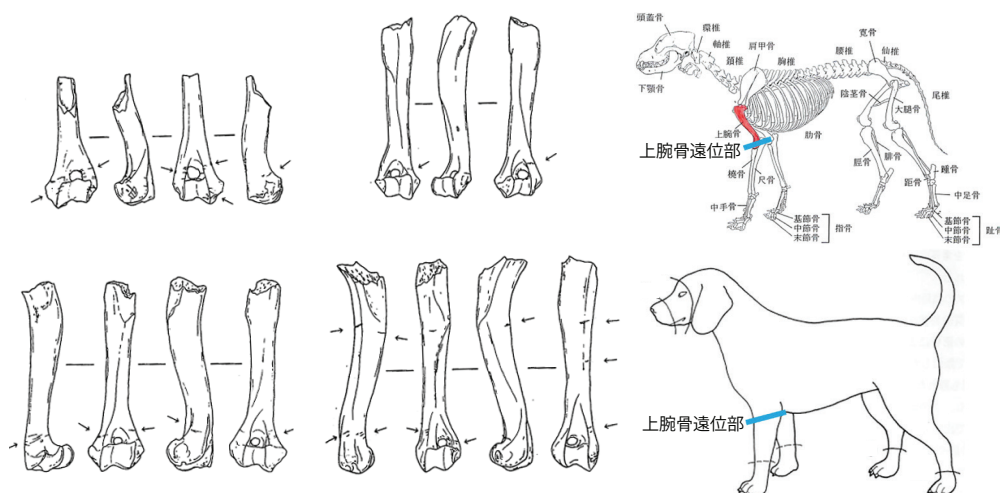
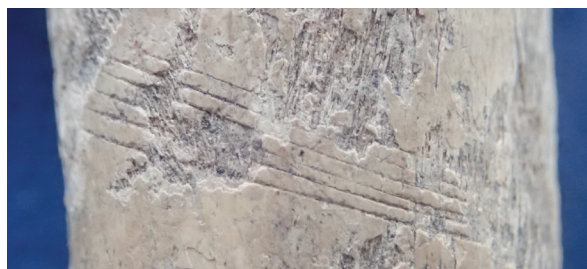


図1 オホーツク文化期のイヌの上腕骨に見られる解体痕例と上腕骨遠位部の位置

【内側面】



【外側面】



【前面】

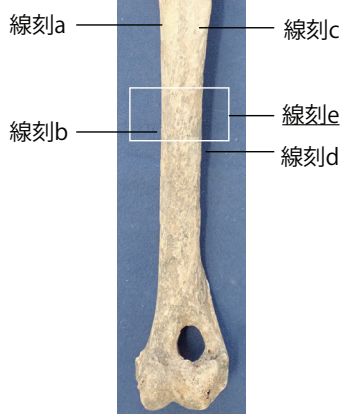


写真2 本資料の線刻部(縮尺不同)

とから、今のところ未実施である。このため、本稿では、形態的特徴をもとに種の検討を進めることとした。

(1) イヌとオオカミの上腕骨比較

本資料の動物種を明らかにするためには、オホーツク文化期のイヌやエゾオオカミと比較することが必要である。このうち、エゾオオカミの出土例は後述するようにきわめて少なく、その可能性が指摘されたトコロチャシ跡遺跡オホーツク地点で出土した左上腕骨も、遠位部のみであることや被熱していたことから（佐藤 2012）、参考程度にとどまる。オホーツク文化期のイヌは大きさの割に骨端幅が広いことも少なくなく、本資料より全長が 30 mm ほど短いにも関わらず、遠位幅が広い資料も見つかっている。このように、限られた箇所と比較では、種の特定は難しい。エゾオオカミについては、対象を広げて、より新しい時代の資料も探したが、上腕骨はこれまでのところ確認できていない⁽¹⁾。

一方、イヌについては、形態に関する研究が戦前から盛んに行われたが、その対象は頭蓋骨と下顎骨にはほぼ限られ（阿部 1933、斎藤 1938、直良 1939、高橋 1940、西本 1981 など）、上腕骨の報告例はわずかである。さらに、イヌは当時、食料や素材（毛皮）として利用されたため、死亡年齢が若く、骨が成長途中の個体が多いことに加えて、遺存過程での破損などもあり、形態分析に利用できる資料は少ない。

このように、比較資料となるエゾオオカミが皆無で、イヌも少ない状況では、詳細な形態比較を行うことは難しい。このため、本稿では、上腕骨全長のみに着目して検討することとした。

図 2 に、本資料とオホーツク文化期のイヌ（大きさや形態からイヌと同定された資料）の上腕骨全長（本資料では残存長と推定全長）を示した⁽²⁾。この図から、本資料（図 2-1）が残存長でもイヌ（図 2-2）よりかなり大きく、推定全長ではその差がさらに広がること

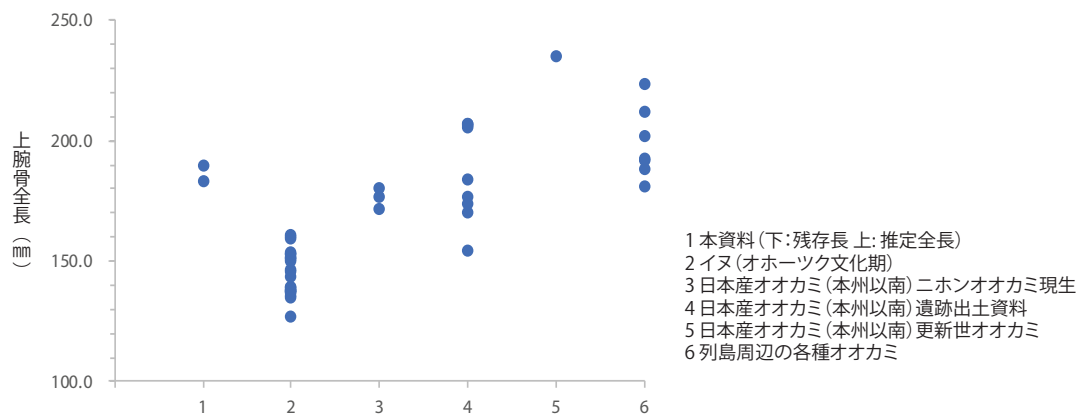


図2 本資料とイヌ、オオカミの上腕骨全長



写真3 本資料とイヌの上腕骨

が分かる。本資料と同じモヨロ貝塚出土のイヌ（内山・梅田 2019）を並べた写真 3 を見ても、両者の差は最大クラスのイヌ（右写真 -1、全長：159.3 mm）⁽³⁾でもかなり大きく、最小クラスのイヌ（右写真 -4、全長：127.0 mm）ではなおさらであった。

一方、エゾオオカミについては全長が分かる資料を欠くため、参考までに、本州以南の日本産オオカミや列島周辺の各種オオカミの上腕骨全長⁽⁴⁾を図 2 に示した。本州以南の日本列島には、小型のニホンオオカミしかいないと長らく考えられてきたが、近年の研究で、数万年前から複数系統のオオカミが渡来していたことが明らかとなり（Segawa et al. 2022 ほか）、日本産オオカミ（図 2-3～5）の上腕骨全長にはかなりの幅が見られた。このうち大きいものは‘更新世オオカミ’と呼ばれる、世界最大級のオオカミである（図 2-5）。葛生遺跡から出土した、上腕骨全長が 235.0 mm もある資料はこれにあたるが、200 mm を超える資料（例えば城ノ台洞窟（縄文時代早期））（図 2-4 内）に対しても、「ニホンオオカミに比してみると、遙かに頑丈な四肢のもち主であったといえよう」（直良 1972：119 頁）と評されている。本州以南の日本産オオカミのなかにはオホーツク文化期のイヌと大きさが重なる資料が 1 点だけあるが（図 2-4 の一番下）、これは原村中学校近傍遺跡（縄文後期）から出土した埋葬個体である（直良 1965）。小型とされるニホンオオカミのなかでもとりわけ小さく、オオカミであるかどうか疑問を呈する意見もある⁽⁵⁾。この 1 個体を除いた本州以南の日本産オオカミと列島周辺の各種オオカミ（図 2-6）はいずれもオホーツク文化期のイヌより大きく、本資料はこれらオオカミの範疇におさまる。

(2) イヌとオオカミの頭蓋骨比較

前述したとおり、上腕骨ではエゾオオカミの資料を欠くため、参考までに、頭蓋骨の最大頭蓋長でもイヌとエゾオオカミとの比較を試みた。オホーツク文化期のイヌとしては 163 個体の計測値が利用できたが⁽⁶⁾、エゾオオカミはオホーツク文化期の資料を欠き、近代の 5 個体⁽⁷⁾のみとの比較である。これに本州以南の日本産オオカミやその他各種オオカミの値も加えた結果を、図 3 に示した。

オホーツク文化期のイヌ（図 3-1）は形態的に多様であることを反映し、最大頭蓋長でもかなりの幅が見られた。大きいものは 200 mm を超えるが、そのほとんどはサハリン産である。エゾオオカミ（図 3-2）はもっとも小さい個体で 232.1 mm（北大所蔵：八雲町の雌資料）、最大では 275.5 mm（北大所蔵：八雲町の雄資料）である。エゾオオカミ内での差も目立つが、オオカミは性差に加えて個体差も大きいとされるため（Rossolimo et al. 1965）、このような幅が出たものとみられる。

小型の種類を含む本州以南の日本産オオカミ（更新世オオカミを除く：図 3-3～5）や列島周辺の各種オオカミ（図 3-7）のなかには、オホーツク文化期の最大クラスのイヌと値が重なるものもあるが、概してオオカミはイヌより大きいことが明らかである。エゾオオカミはオオカミのなかでも大型の種類のため、イヌとの差は明瞭である。

続いて、上腕骨全長と最大頭蓋長の計測値がともに判明している 5 個体のオオカミ（本州以南の日本産オオカミ）について、表 1 に示した。両計測値の関係をピアソンの相関係数検定によって調べたところ、図 4 に示したような結果となり、両者の間には統計的に有意な ($P < 0.05$) 強い相関関係 ($r = 0.911$) が認められた。

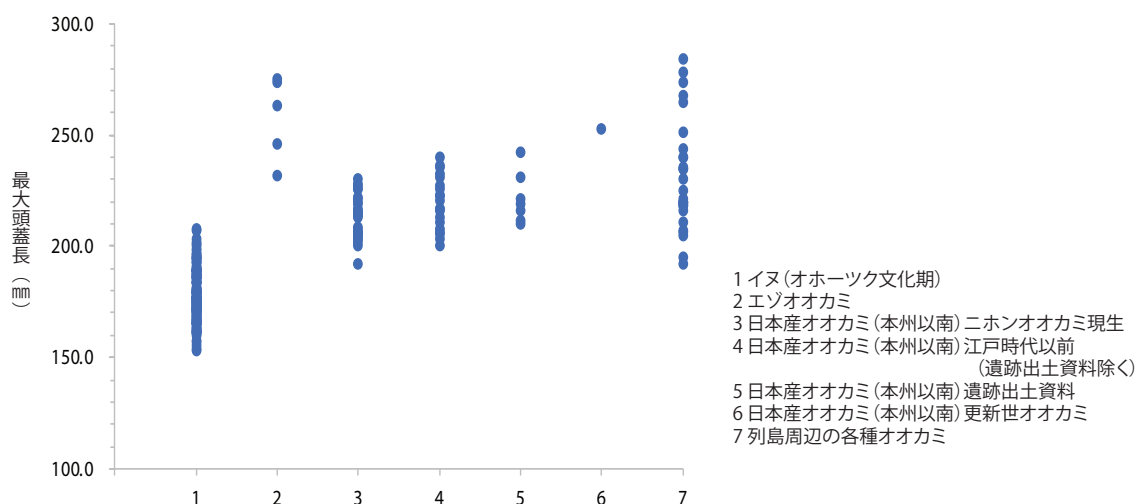


図3 イヌとオオカミの最大頭蓋長

表1 上腕骨全長と最大頭蓋長がともに判明している個体

種	採集地	時代・年代(遺跡)	所蔵者・所蔵機関	個体No.	雌雄	上腕骨 上腕骨全長(左右)	頭蓋骨 最大頭蓋長
ニホンオオカミ	福島県	1870年頃	国立科学博物館	NSMT-M100・M887	雄	176.8 (?)	216.3
ニホンオオカミ	福島県郡山市	室町～戦国(荒井猫田遺跡)	郡山市教育委員会		雄	183.8 (右)	231
ニホンオオカミ	熊本県八代郡泉村	? (矢山岳のたて穴)	国立科学博物館	NSMT P9792 (矢山岳標本)	?	170.0 (右)	211.5
ニホンオオカミ	熊本県八代郡泉村	室町～江戸初期(京丈山洞穴)	熊本博物館	KCM 1-109	?	176.6 (左)	218.8
ニホンオオカミ	?	1886年	ベルリン自然史博物館	ZMB Mam42983	雄	171.4 (?)	202

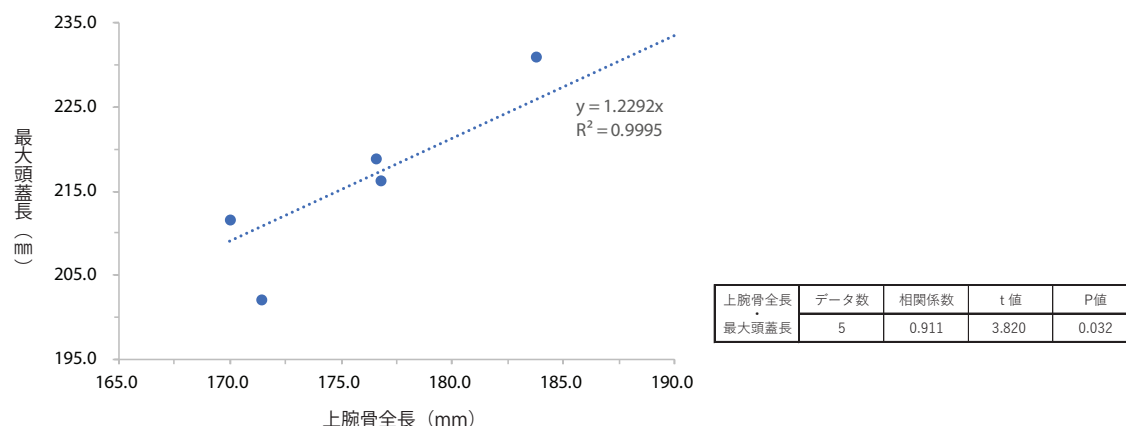


図4 上腕骨全長と最大頭蓋長の相関関係図

種が異なるため、参考程度となるが、この結果にもとづけば、上腕骨の残存長183.33mmで推定全長が190mmほどの本資料の最大頭蓋長は230mmを超える可能性がある。これは、エゾオオカミの小型の個体(雌に該当する可能性もある)に重なる大きさである。

(3) 動物種の見通し

上腕骨と頭蓋骨にもとづく検討から、本資料はイヌではなく、エゾオオカミが何らかの形で関与した個体であった可能性が高いと評価できる。なお、エゾオオカミだとしても、野生個体だけでなく飼育個体であった可能性や、イヌとの交雑個体であった可能性もあり、種についての検討は今後も取り組むべき課題といえる。

ここで関係性が浮上したエゾオオカミであるが、オホーツク文化期ではこれまでにほとんど出土例が知ら

れておらず、その数は、種が特定されていない資料やオホーツク文化期とは断定されていない資料も含めて、3遺跡から出土した7点にとどまる⁽⁸⁾(表2)。

このうち、トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の左上腕骨遠位部(佐藤 2012)と、常呂川河口遺跡の左橈骨中間部2点(新美 1996)は住居内骨塚から出土したとみられ⁽⁹⁾、被熱し、収縮している。トコロチャシでは、1960・1963年度の調査で3点(1号竪穴の上層と下層から各1点、2号竪穴の第12層から1点)が出土したと報告されているが(直良 1964)、部位や状態などの詳細は不明である。資料の所在も明らかでないため、これ以上の検討は難しい。以上の6点は北見市常呂町で確認され、トコロチャシの1号竪穴上層資料以外はいずれも貼付文期に属する。

残り1点は、香深井1遺跡の刻文期の魚骨層Ⅳ(青

表2 オホーツク文化期のエゾオオカミの出土例(可能性があるものを含む)

遺跡名	遺構・層	時期	種(報告書の記載にもとづく)	部位	状態	出典
香深井1遺跡	魚骨層Ⅳ	刻文	エゾオオカミか大陸の大型のオオカミ	上顎第1後臼歯(左)		大場・大井編1981
常呂川河口遺跡	15号住居址(埋土)	貼付文	オオカミ	橈骨中間部(左)	被熱	新美1996
	15号住居址(攪乱)	貼付文	オオカミ	橈骨中間部(左)	被熱	
トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点	7号竪穴(奥壁部)	貼付文	イヌ属(エゾオオカミ?)	上腕骨遠位部(左)	被熱	佐藤2012
トコロチャシ	1号竪穴(上層)	?	エゾオオカミ	?		直良1964
	1号竪穴(下層)	貼付文	エゾオオカミ	?		
	2号竪穴(第12層)	貼付文	エゾオオカミ	?		

灰色砂層中) から出土した上顎第 1 後臼歯である (大場・大井編 1981)。計測値 (歯冠長: 17.2 mm、歯冠幅: 20.8 mm) も提示されており、報告者である西本豊弘氏は、「その大きさからみて、ニホンオオカミではなく、より大きいエゾオオカミかまたは大陸系の大型のオオカミと思われる」 (前掲書: 191 頁) と指摘している。筆者は同資料を実見したうえで、エゾオオカミ 4 個体 (北海道大学北方生物圏フィールド科学センター収蔵) と比較し、エゾオオカミとしても問題ない大きさであることを改めて確認した。

本資料がエゾオオカミだとすれば、道内で 8 点目の出土例となる。しかし、資料数がまだ少ないうえ、時期や部位、出土状況についての情報を欠く資料もあるため、オホーツク文化期におけるエゾオオカミの利用については不明な点が多い。

3. イヌ科動物の線刻入り上腕骨の類例と本資料との比較

本資料に多くの線刻が刻まれていることは、すでに述べたとおりである。これらの線刻はいずれもかなり細く浅いうえ、少なくとも 5 ケ所のまとまりが見られるものの、文様や情景といえるようなものではない。しかし、これらに実用的な意図が見出せない以上、何らかの精神的意味を込めて刻まれたものということになる。

ここでは、まず、オホーツク文化とその周辺文化の

類例を挙げ、それらとの比較を試みることにする。

(1) オホーツク文化と周辺文化の類例

オホーツク文化の類例としては、香深井 1 遺跡のイヌの上腕骨 3 例がよく知られている (大場・大井編 1976) (図 5-1 ~ 3)。これらはすべて刻文期の魚骨層から出土し (1: 魚骨層Ⅲ、2・3: 魚骨層Ⅳ)、「装飾あるイヌ上腕骨」 (前掲書: 528・660 頁) と称されているように、とくに 1・3 では明らかに文様とみなせる線刻が刻まれている。平行線や鋸歯文といった線刻が見られるが、1 ではそれらがかなり密なうえ、骨幹部上半の後面に上下に 8 つ並んだ決りもあり、3 点のなかでもっとも装飾性が高い資料である。一方、2 は横位の線刻が数条刻まれるのみであり、遠位の関節部には解体痕とみられる傷も確認されている。

骨幹部に V 字の線刻が刻まれた種屯内遺跡のイヌの上腕骨も、類例の可能性はある (種屯内遺跡調査団 1998) (図 5-4)。この資料では、磨かれたことによるのか、線刻部分を含めた骨幹部で光沢が 3 ケ所確認されている (図中のスクリントーン部)。さらに、近位部の関節下が一部削られており (図中上部の矢印部)、遠位部の滑車上孔が広げられた可能性もある (図中下部の矢印部)。刻文期の資料である。

さらに、モヨロ貝塚館で展示されているイヌの上腕骨にも、明瞭な短い線刻がほぼ並行して 3 条確認でき

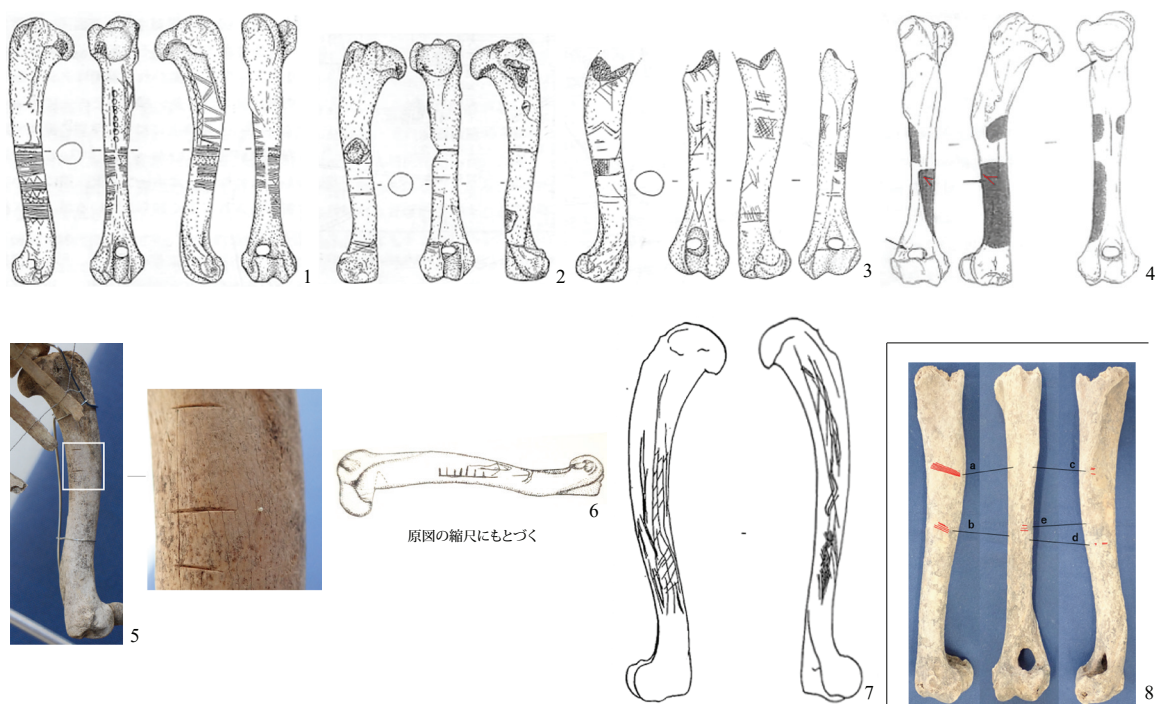


図5 オホーツク文化と周辺文化のイヌ科動物の線刻入り上腕骨

1~3: 香深井1遺跡 (大場・大井編1976) 4: 種屯内遺跡 (種屯内遺跡調査団1998)

5・8: モヨロ貝塚 (筆者撮影) 6: ノーバヤブローチノエ2遺跡 (Горбунов1985) 7: ウイカ遺跡 (Лебединцев1990)

る(図 5-5)。一般的な解体痕とは位置や形状が異なるため、これも類例といえるかもしれない。8 号竪穴住居跡魚骨層(北海道網走市教育委員会 2009)から出土した資料で、貼付文期の可能性がある⁽¹⁰⁾。

道外に目を向けると、サハリン南部西岸に位置するノーバヤブローチノエ 2 遺跡で線刻されたイヌの上腕骨が報告されている(Горбунов 1985⁽¹¹⁾) (図 5-6)。オホーツク文化期の資料であるが、詳細な時期は不明である。その他の資料とは異なり、海上狩猟の情景が表された絵画的な線刻である。上腕骨の全形はそのまま保たれているが、近位部の関節下に深さ 1 cm の穴が開けられており、喫煙パイプ様と報告されている。全長は図の縮尺からすると 134 mm ほどであるが、近位部の穴が 1 cm として図化されていたとすれば、全長は 160 mm ほどになる。いずれも推定値のため参考程度にとどまるが、オホーツク文化期のイヌの範疇におさまる大きさである(図 2-2 参照)。

さらに、オホーツク文化圏の北に位置するオホーツク海北西岸では、櫛目文や刻文が施文された出土土器からオホーツク文化期の刻文期に関連するとみられる初期鉄器時代のウイカ遺跡(Лебединцев 1990)でも類例があることを、菊池俊彦氏が指摘している(菊池 1993・1995) (図 5-7)。線刻は、骨幹部の広い範囲に施されている。ランダムな線刻もあれば、鋸歯文のほか、上下方向に伸びる長い 3 条の線刻の間を前面に向かって左下がりの短い線刻で埋めた箇所なども見られる。切り傷や削り跡もあるとされるが、図ではどの部分がそれらにあたるのか、判然としない。この資料は近位部をわずかに欠くため全長は不明であるが、縮尺からすると残存長は 218 mm ほどと、明らかにオオカミの範疇に入る。この遺跡では、ほかにも縞模様が施された骨が出土したとされるが、図示されていないため、イヌ科動物の上腕骨であるかどうかも含めて、詳細は不明である。

(2) 本資料との比較

以上挙げた 7 点の類例はいずれも、素材とされたイヌ科動物の上腕骨がそのまま用いられているため、本資料とは形状が酷似している。一方、大きさの点では、本資料とオオカミとみられるウイカ遺跡の資料(図 5-7・8)が、その他の資料に比べて大きい点が目につく。

線刻の内容にはあまり共通性が見られないが、強いて挙げれば、香深井 1 遺跡の 3 点(図 5-1～3)で横位方向に線刻が展開する点が共通するのと、種屯内遺跡とモヨロ貝塚(図 5-4・5)で、短いながらも明瞭な線刻が刻まれる点に共通性が見出せる。きわめて異質なのは、ノーバヤブローチノエ 2 遺跡の

海上狩猟の線刻(図 5-6)である。このような線刻は、オホーツク文化期の鳥骨製針入れでよく知られるが(八幡 1943 ほか)、イヌの上腕骨製としては唯一の例である。

所属時期について、モヨロ貝塚を除いた道内の 4 点は刻文期であり、出土土器からすると、ウイカ遺跡の資料もこれに併行する可能性がある。一方、モヨロ貝塚の資料は貼付文期の可能性が高く、本資料とノーバヤブローチノエ 2 遺跡の資料は詳細な時期が不明である。このように、所属時期については刻文期にやや多い傾向が見出せる。

また、地域については、香深井 1 遺跡から 3 点が出土していることもあり、礼文島・利尻島に半数ほどが集中する。

出土地点や出土状況については、香深井 1 遺跡の 3 点とモヨロ貝塚の 1 点が魚骨層からの出土である。香深井 1 遺跡のなかでもっとも装飾性の高い資料(図 5-1)は、写真図版(大場・大井編 1976:PL.88)や報告内容から、攪乱の脇で出土し、近くから鹿角製柄の鉄製ナイフが見つかったことが分かる。その他の資料では、出土地点や出土状況についての言及がとくになく、遺構に伴ったり配置されたりしたような特別な扱いは認められなかったようである。唯一、本資料が墓に伴った可能性があるが、人骨と同じ箱に保管されていたことのみを根拠とするため、断定は難しい。

4. イヌ科動物の線刻入り上腕骨の意味

オホーツク文化やその周辺文化に属する、本資料を含めた 8 点のイヌ科動物の線刻入り上腕骨は、いずれも上腕骨の全形をそのまま保っている点の特徴である。骨角器は、素材とされた骨格の形状や質を生かしつつも、製作する製品に合わせて全形を変えていくのが通常である。例えば、オホーツク文化期の組み合わせ式釣針の軸部では、海獣類の肋骨や尺骨、下顎骨といった湾曲部を持つ部位が素材として選択され、そこから釣針の軸部としてさらに適した形に加工されていく。このような骨角器の一般的な製作工程に対して、イヌ科動物の線刻入り上腕骨はかなり特異である。これに類する資料としては、穿孔品が挙げられる。オホーツク文化期の穿孔品にはさまざまな素材のものがあり、歯牙製としてはサメ類やラッコ(犬歯)、キタキツネ(犬歯)、カラフトブタ(切歯、犬歯)、ヒグマ(犬歯、後臼歯)、キタオットセイなどのアシカ科(切歯、犬歯)、中手骨・中足骨製としてはウ類やヒグマ、海獣類、指骨製としては猛禽類(末節骨)やヒグマ(基節骨、末節骨)、陰茎骨製としてはヒグマやキタオットセイが知られる⁽¹²⁾。穿孔品では、当時

よく祀られたヒグマや他地域から持ち込まれて飼われるようになったカラフトブタ、上質な毛皮や羽が採れるラッコやキタオットセイ、キタキツネ、猛禽類などが選ばれており、さらに、歯牙や手足先（中手骨・中足骨、指骨）、陰茎骨といったそれぞれの種にとって特徴的な部位が用いられている。このように、素材の全形をそのまま保った非実用品には、素材とされた動物種に対する、当時の人の特別な思いを感じ取ることができる。

このような視点に立って、イヌ科動物の線刻入り上腕骨について見てみる。

当該資料では、イヌとオオカミの2種が選択されているが、両種は動物としてはきわめて近いものの、人との関係性では、家畜と野生獣という対極的な位置づけにある。オホーツク文化期におけるイヌとエゾオオカミを比べてみると、イヌは利用程度に地域性を持ちながらも人との関わりが概して密だったのに対して、エゾオオカミは出土例がごくわずかであり、人との接点はかなり限られていたと推測される。このように似て非なる存在の両種で、線刻入り上腕骨が少ないながらもともに製作されたようであることは、当時、イヌとオオカミを別物としてではなく、一連の動物として捉える認識があった可能性を示している。本資料については、その大きさをエゾオオカミが関与した可能性が高いとしたが、飼育されたエゾオオカミやイヌとの交雑個体であった場合には、イヌと同様の扱いがされたことがより理解しやすい。これらの点については、先に挙げたDNA分析に加えて、炭素・窒素安定同位体比を用いた食性分析による検討も可能であるが、破壊分析であるため、実施の可否は慎重に議論されるべきであろう。

なお、イヌは動物儀礼で対象とされることが稀で、野生獣とは異なる扱いや認識がされていたことが知られる。ただし、このことが直ちにイヌの精神的位置づけの低さにつながるのではなく、人側に位置する動物として、野生獣とは異なる価値が見出されていたと考えられる。線刻入り上腕骨は、イヌやそれに関連するオオカミにも精神的価値があったことを示すものであり、これらがイヌ飼育のとくに盛んな礼文島・利尻島や網走市、サハリンで見つかっている点も示唆的である⁽¹³⁾。

続いて部位について、上腕骨が選ばれた理由を推測することは容易でないが、例えばイヌでは、上腕骨を含めた前肢がさまざまなサインを出す際に機能するため（例えば、飼い主の関心を惹きたい時や獲物の発見を飼い主に知らせたい時など）、種を特徴づける部位とみなされたのかもしれない。さらに、穿孔品と共通する孔が、イヌ科動物の上腕骨にはもともと開い

ている点も（遠位部の滑車上孔がこれにあたる）、部位の選択に影響した可能性がある。

このように、イヌやエゾオオカミはオホーツク文化やその周辺文化において精神的にも価値があるものとみなされ、稀にはあるが、イヌ利用がとくに盛んな地域で線刻入り上腕骨が製作されるに至ったと推測される。

なお、本資料が人骨に伴ったとすれば、その上腕骨の持ち主である個体は被葬者と深い関係にあった可能性が高まる。すなわち野生個体ならば獵者と獲物、飼育個体ならば飼い主と飼われた個体という具合である。出土状況の詳細が不明なため、これ以上の検討はできないが、オホーツク文化期に個人との関係が指摘された動物資料は皆無に等しく、当時の人と動物との関係性について考えるうえでも注目される資料となり得る。

おわりに

モヨロ貝塚から出土したイヌ科動物の線刻入り上腕骨について、動物種と製作された意味について検討を試みた。いずれもさらなる検討を要するが、まず、動物種については、その大きさをエゾオオカミが関与した可能性が高いことを示せたことは、一つの成果である。エゾオオカミは、食物連鎖の頂点に位置する野生獣で、ヒグマと同じように扱われてもおかしくない存在であるが、実際にはそうっていない。ただし、これまでに確認されたわずかな出土例のなかに、動物儀礼に関わった事例が含まれることや、生息圏外の礼文島に一部の部位だけかもしれないが持ち込まれた事例があること、さらに、本資料がエゾオオカミだとすれば、非実用的な意図のもとで上腕骨に線刻されたことになり、たとえ人との接点が少なく、利用程度が低くても、エゾオオカミに対して高い精神的価値を認めていたことが想像される。さらに、これまでに周辺文化で類例があったオオカミの上腕骨への線刻がオホーツク文化圏内でもイヌと共通して認められることになれば、家畜と野生獣を明確に分けるオホーツク文化期ではきわめて特異な事例となり、当時の動物観について検討する際に注目すべき資料となろう。いずれにせよ、エゾオオカミと人との関わりについてはこれまであまり検討が進んでいないため、今後は、他の時代についても出土例を集め、利用内容の変遷を辿りながら、関係性を紐解いていきたい。

なお、本稿では、エゾオオカミが関与する可能性が高いとしたが、イヌである可能性が完全に否定されたわけではない。しかし、これが仮にイヌだとすれば、これまでにまったく知られていない超大型のイヌということになり、イヌ利用について検討するうえでも興味

深い資料となる。

続いて、線刻された上腕骨の意味については、素材とされた上腕骨の原形がそのまま保たれ、動物種が認識しやすい状態であったことから、その動物種に対する強い思い入れが反映された資料とみなした。これまでエゾオオカミについては出土例の少なさから利用内容や位置づけが不明であり、イヌについては食料や素材（毛皮）として利用される実用家畜という印象が強かった。しかし、イヌとオオカミで共通して製作された線刻入り上腕骨の存在により、動物儀礼の対象になることがほとんどなかった両種に対して、他の動物とは異なる扱いや認識がされていた可能性がうかがえたことは注目される。

また、素材の全形を保った資料として、穿孔品があることはすでに述べたが、これらも当時の動物観について明らかにするための重要な手がかりとなる。これまではおもに動物儀礼の場から出土した動物遺体や動物意匠をもとに動物観の検討が進められてきたが、今後は、これら素材の原形を保った資料についても検討に加えていくことで、当時の動物観をより深く理解するための一助としたい。

謝辞

本稿をまとめるにあたりご協力いただいた、梅田広大氏、江田真毅氏、加藤克氏、河合久仁子氏、木山克彦氏、熊木俊朗氏、坂本尚史氏、佐藤雅彦氏、中沢祐一氏、中村雄紀氏、西脇対名夫氏、福井淳一氏、Василевский, А. А. 氏、Шубина, О. А. 氏に深謝の意を表します。なお、本研究はJSPS 科研費JP23H04841（学術変革領域研究（A）北海道における先史人類及び文化の形成（研究代表者：加藤博文））とJSPS 科研費JP20K01079（基盤研究（C）解体痕などからみる毛皮利用史—北海道の古代・中世を対象に—）の助成を受けたものです。

註

- 1 北海道大学北方生物圏フィールド科学センターには、センター内の博物館で展示中のエゾオオカミの剥製2個体から取り出された骨格標本が収蔵されているが、上腕骨は含まれていない。
- 2 オホーツク文化期のイヌには、北海道とサハリンの出土資料が含まれる。ここではイヌに関する文献（大場・大井編 1976、内山 2000・2011、長谷部（茂原解説）2009、内山・梅田 2019）に掲載された計測値に加えて、筆者による計測値も用いた。
- 3 オホーツク文化期のイヌの上腕骨全長では、香深井 1 遺跡（魚骨層Ⅲ₀）の 161 mm（大場・大井編

1976）や東多来加貝塚の 160 mm（長谷部（茂原解説）2009）がこれまでのところ最大である。また、展示中のため正確には計測できていないが、モヨロ貝塚の 8 号竪穴住居跡魚骨層から出土した、線刻らしきものが見られる上腕骨も、162 mmほどとかなり大きい（この計測値は、図 2 には含めていない）。

- 4 オオカミに関する文献（斎藤 1936・1964、直良 1965・1972、茂原 1986、北村ほか 1999、茂原・江木 2001、長谷川ほか 2004、八木ほか 2016）から計測値を収集し、これに筆者による計測値も加えた。飼育個体を含む。
- 5 報告者である直良信夫氏は、骨相や大きさはニホンオオカミ的であるとしながらも、ストップがやや強いことなどから、「犬属」（直良 1965：52 頁）としたうえで、ニホンオオカミが家犬化した可能性にも言及している。
- 6 計測値はイヌに関する文献（西本 1981、茂原 1986、新美 1995、内山 2000、長谷川（茂原解説）2009）に加えて、筆者による値も用いた。
- 7 このうち 4 個体は北海道大学北方生物圏フィールド科学センターの収蔵資料、1 個体はロンドン自然史博物館の収蔵資料（Pocock 1935）である。前者は、筆者による計測値を用いた。
- 8 エゾオオカミの出土例については、福井淳一氏（北海道埋蔵文化財センター）よりご教示いただいた。7 点のうち、トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点から出土した被熱した左上腕骨遠位部は、29 mm を超える遠位幅からエゾオオカミの可能性が高いとされるが（佐藤 2012）、特定はされていない。なお、同資料を実見すべく探したが、見つけることができなかった。また、トコロチャシから出土したエゾオオカミ 3 点のうち 1 点が確認された 1 号竪穴上層は、「時代的に若干新古のものが混在しているのではあるまいか」（直良 1964：178 頁）とされる。実際に、同層からはウシも出土しており、オホーツク文化期ではない可能性もある。
- 9 常呂川河口遺跡の橈骨 2 点は埋土と攪乱からの出土であるが、15 号住居址の骨塚に由来する資料とされている（新美 1996）。これらの資料も探したが、実見できなかった。
- 10 梅田広大氏（網走市立郷土博物館）のご教示による。
- 11 同文献の入手には、西脇対名夫氏、Василевский, А.А. 氏（サハリン国立総合大学）、Шубина, О.А 氏（サハリン州立郷土博物館）から多大なご助力を賜った。
- 12 オホーツク文化期の穿孔品をすべて網羅したわ

けではないため、漏れもある。

13 ウイカ遺跡が属する初期鉄器時代のイヌ利用の詳細は不明である。

引用文献

阿部余四男 1933「樺太北貝塚の犬について」『日本犬』6-3 2-5 頁
内山幸子 2000「オホーツク文化におけるイヌの埋葬について」『考古学雑誌』85-3 83-97 頁
内山幸子 2011「Ⅳ 動物遺体」『利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書Ⅱ』北海道利尻富士町教育委員会 161-203 頁
内山幸子・梅田広大 2019「北海道本島におけるオホーツク文化期のイヌーモヨロ貝塚の貝層出土資料を中心に」『東海大学国際文化学部紀要』12 69-81 頁
大場利夫・大井晴男編 1976『香深井遺跡』(上) 東京大学出版会
大場利夫・大井晴男編 1981『香深井遺跡』(下) 東京大学出版会
菊池俊彦 1993「環オホーツク海の古代文化」『海・潟・日本人 - 日本海文明交流圏 - 』講談社 124-159 頁
菊池俊彦 1995「オホーツク海北西岸の初期鉄器時代の遺跡」『北海道考古学』31 215-228 頁
北村直司・小原巖・南雅代・中村俊夫 1999「熊本県八代郡泉村京丈山洞穴より産出したニホンオオカミ全身骨格」『熊本県博物館報』11 35-69 頁
斎藤 弘 1936「石器時代犬の體格とヤマイヌ鑑別私見」『日本犬』5-4 1-30 頁
斎藤 弘 1938「北千島古守島竪穴並に樺太東多来加貝塚出土家犬骨に関する報告」『民族学研究』4-4 683-704 頁
斎藤弘吉 1964『日本の犬と狼』雪華社
佐藤孝雄 2012「トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点7号・9号・10号竪穴の脊椎動物遺体」『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点』東京大学大学院人文社会系研究科 312-359 頁
茂原信生 1986『東京大学総合資料館所蔵長谷部言人博士収集犬科動物資料カタログ』東京大学総合研究資料館
茂原信生・江木直子 2001「付章1 荒井猫田遺跡出土の中世ニホンオオカミの全身骨格」『荒井猫田遺跡一第14次発掘調査報告一』291-302 頁
高橋多蔵 1940「樺太犬に就いて」『樺太時報』37 67-80 頁
種屯内遺跡調査団 1998「種屯内遺跡第2次調査

概要(1996年)」『利尻研究』17 67-96 頁
直良信夫 1939「オホーツク海沿岸の史前家犬について」『犬の研究』1月号 98-103 頁
直良信夫 1964「附録1.トコロ、ウトロ、トビニタイ各遺跡発掘の自然遺体」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』(下)176-189 頁、表5
直良信夫 1965『日本産狼の研究』校倉書房
直良信夫 1972「日本産狼の遺体」『古代遺跡発掘の脊椎動物遺体』校倉書房 109-159 頁
中沢祐一・伊藤麻由・大沼まり・澤井玄・高橋健・種石悠編 2025『北海道大学所蔵モヨロ貝塚(網走市)収集考古資料』北海道大学
新美倫子 1995「第6章 動物遺体」『遺跡発掘調査報告書 利尻富士町役場』73-83 頁
新美倫子 1996「常呂川河口遺跡14・15・16号住居址出土の動物遺存体」『常呂川河口遺跡(1)』北海道常呂町教育委員会 599-614 頁
西本豊弘 1981「イヌ」『香深井A遺跡』(下) 東京大学出版会 415-425 頁
長谷川善和・小原巖・曾塚孝 2004「石灰岩洞窟内で発見された九州産ニホンオオカミ遺骸」『群馬県立自然史博物館研究報告』8 57-77 頁
長谷部言人(茂原信生解説) 2009「石器時代日本犬」『動物考古学』26 81-170 頁
北海道網走市教育委員会 2009『史跡最寄貝塚』
八木博・井上百合子・大場烈夫・森田正純 2016「ベルリン自然史博物館に所属するニホンオオカミ3個体の標本 - 頭骨、全身骨格、毛皮について」『ANIMATE』13 76-81 頁
八幡一郎 1943「骨製針入」『古代文化』14-8 1-9 頁
Elizabeth, S. 1972 *Atlas of Animal Bones*.
Горбунов С.В. 1985 О морском зверобойном промысле аборигенов сахалина. *Этнографические исследования Сахалинского областного краеведческого музея*. сс. 27-39.
Лебединцев, А. И. 1990 *Древние приморские культуры северо-западного приохотья*.
Pocock, R. I. 1935 The races of *Canis lupus*. *Proceedings of the General meeting for Scientific Business of the Zoological Society of London*. pp.647-686.
Rossolimo, O. V. and Dolgov, V. A. 1965 Variability of the skull in *Canis lupus* Linnaeus, 1978 one from the USSR. *Acta Theriologica*, 10. pp. 195-207.
Segawa, T., Yonezawa, T. Mori, H., Sakamoto, M., Kohno, N. and Nishihara, H. 2022 Paleogenomics reveals independent and hybrid origins of two morphologically distinct wolf lineages endemic to Japan.

Current Biology, 32. pp.2494-2504.